

医学科2年生を対象に、学内の研究室及び学外の大学・研究機関で研究室配属実習を行う「リサーチ・クラークシップ」を1月4日(木)～3月6日(水)の約9週間実施しました。本科目は、学生自ら直接専門領域の研究内容に触れ、さらには高度な実験科学の進め方を実際に体得することによって、研究活動の意義及びそれを支える研究者の心を理解して research mind を培うことを目的としたプログラムです。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で中止していた海外への学生派遣を3年ぶりに再開し、海外8機関、国内20機関及び学内37教室等で実施しました。また、最終日の3月6日(水)には、成果発表会を10班に分かれてZoomで開催し、約9週間の実習成果の発表を行いました。



成果発表会 優秀賞受賞者の表彰式

この度、リサーチ・クラークシップで未来基礎医学の森英一朗先生のご紹介で、The University of Texas Health Science Center at San Antonio の Burma lab で約2か月間、「Elucidating the mechanism of glioblastoma recurrence by radiation-induced cellular senescence」という演題の研究に取り組む機会をいただきました。

本研究は、膠芽腫という致死率が高い脳腫瘍に対して必要となる放射線療法の問題を解決するために、その鍵となる因子を探索するものでした。今回の研究を通して、膠芽腫を根治するためには、臨床の課題を研究で解決し研究の成果を臨床に繋げることが重要であると改めて認識することができました。そのため、医師になってからも臨床と研究の両側面から疾患に対してアプローチできるように、引き続き医学の勉強と研究に取り組んでいきます。最後に、このような貴重な機会をサポートしてくださった未来への飛躍基金に心より御礼申し上げます。

(後列右端 大平 雅也さん)

化学教室の酒井宏水教授のご紹介で、防衛医科大学校免疫微生物学教室の木下学教授のもとで腎不全マウスの各臓器の免疫細胞機能の解析を行いました。

研究について何の経験もない状態で始まり、精度の高い実験を行うことが最も難しく時間がかかるものだというのを痛感しました。しかし、徐々に技術が身につき明確な結果が出た時は達成感があり、それが新たな探究心に繋がるという研究の面白さを感じました。以前から臨床医でありつつ研究するという働き方に興味を持っていましたが、リサーチ・クラークシップの経験を通して研究というキャリアがより具体性を持って感じられました。

研究への興味を後押しする機会を与えてくださった酒井教授、木下教授をはじめ関係者の皆様、そして未来への飛躍基金にお礼申し上げます。

(前列右から2番目 越智 彩風さん)

今回のリサーチ・クラークシップでは、血栓止血医薬生物学講座の坂田先生のもとで、2ヶ月と少しの間自分の興味がある事柄を研究させていただきました。テーマは「テニス後の体温変化による身体負荷の可視化解析」です。

このリサーチ・クラークシップを通して、私は研究に対する姿勢や取り組み方を学ぶことができました。元々臨床にしか興味が無かったのですが、自分の疑問に思ったことを試行錯誤を重ねながら解決していくことにやりがいを感じ、加えて先生方の丁寧な指導により研究の基礎や心構えの一端を学ぶことができ、日常では関わるのが難しい「研究」をより身近に感じられました。

最後になりましたが、リサーチ・クラークシップ中にお世話になった血栓止血医薬生物学講座の先生方、特に坂田先生と廻角先生に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

(後列左から2番目 松本 羽留久さん)

本年度のリサーチ・クラークシップは、学内37教室、学外(国内)20機関、学外(海外)8機関のご協力のもとに、無事に終了することができました。コロナ禍で中断していた海外派遣も、多くの方々のご支援のもとに再開できました。医学部の学生生活は、ともすると試験勉強に追われがちですが、そのような中で、アカデミックな探究心の醸成を柱に据えた本科目は、大学らしい教育の場と考えております。これもひとえに、諸先生方のご指導あつてのことであり、厚く感謝申し上げます。写真の学生さんたちの生き生きとした表情を見て、さらに実りのある科目にできるようにと、気持ちを新たにしております。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

(科目責任者 堀江基礎教育部長)